2025年2月16日（日）主日朝礼拝説教

『幸せはどこに』井上隆晶牧師
箴言8章32～36節、ルカによる福音書15章11～25節

❶【罪の恐ろしさ～虚像を追いかけさせる～】

この譬え話は、イエス様が罪人たちと一緒にいる時に、それを見たファリサイ派の人や聖書学者たちが不平を言ったことから話されたものです。（ルカ15：1～2）父親は神様を、二人の息子は私たち人間を象徴していますが、ここで兄は律法学者たちやファリサイ派の人たちを、弟は罪人を象徴しています。ただ私たちはどちらにもなり得ることを忘れてはなりません。下の息子は「**私がいただくことになっている財産の分け前をください**」（12節）と言うと、父親は兄にも弟にも財産を分けてあげます。弟はそれをお金に変え、遠い国に旅立ちました。神から遠い国とは「**この世**」を象徴しています。弟はこの世に憧れ、放蕩の限りを尽くして財産を無駄遣いし、すべてを使い果たしてしまいます。ひどい飢饉が起こり、食べるのにも困り始めたので、彼は豚の世話をするようになります。豚はイスラエルでは汚れた動物ですから、彼は生きる為に心と体を汚したことを意味しています。悪魔は囁きます。「現実は厳しいのだ、生きる為には悪と妥協しなさい。」霊的無知はせっかくの恵みを無駄にし、実を結ばないもののために生命（時間）を浪費させます。すべての幸せは過ぎ去り、二度と戻ってきません。失って初めて私たちは与えられていた恵みに気がつき、それをなぜもっと喜び、大切にできなかったのかと後悔します。ある人が「幸せを遠くに捜してはいけない。幸せは自分の周囲一メートル以内に捜しなさい」と言っていますが、私たちは遠くに捜してしまうのです。**いくら豊かに与えられても、人間はそれに満足できず、恵みを受け取る力がないのです。それが罪の恐ろしさです。**

❷【回心とは～善への憧れ～】

飢えが究極までいった時、「**彼は我に返って**」（15：17）言いました。「**父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。**」（15：17）「我に返る」を、口語訳では「**本心に立ち返って**」と訳しています。我に返るとはどういうことなのでしょう。

●あるアルコール依存症の人は、昔はサラリーマンをしていたのですがノルマに疲れて仕事を辞め、両親のお金でブティックを開いたのですが事業にも失敗し、アルコールを飲むようになり、家出をして釜ヶ崎に住むようになりました。ある時、お店で酒を飲んでTVを見ながら「俺はここで何をしているのだろう」と思い、はっとして家に帰り、治療を始めたという話を聞いたことがあります。

誰の心にも「私はここで何をしているのだろう。落ちたな。情けないな」という心があるのです。人間の心と体には回復しよう、善くなろうとする力、「**自己回復**

能力（リジリアンス）」が備わっています。それは私たちの中に神様が埋め込まれた神の像、神性の断片です。これは罪をもってしても破壊できないものです。**愛はそれを開花させるエネルギーです。回心・悔い改めとは、罰を恐れて悪事をやめることではなく、むしろもっと積極的なものであり、善への回帰、善いものを憧れることです。**そして失った美しさを手に入れるために行動することです。曽野綾子さんはこんなことを言っています。

●「徳は結果を振り返ることではない。徳は目標に目を上げることである。失敗しても性こりなく、自分の美の究極に向かいつづけることである。」

この自分の美こそ、自分の中に眠っている「神の像、キリストの似姿」です。それを追求するのです。「罪は私の一部であって全てではない、私は本当は美しいのだ」と、どこまでもあきらめない事です。

❸【天国には正しい人は誰もいない。天国は神の憐れみで満ちている場である】

そこで彼は立ち上がって父の家に帰ります。すると「**遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻し**」（15：20～21）ます。息子は父親に謝ろうとしますが、父はほとんど聞いていません。すぐに僕に命じて、息子に最上の服を着せ、指輪を渡し、履物を履かせます。それは「朽ちない体」、「神の子の資格」、「自由」を象徴しています。**これらは私たちが正しいから与えられるものではなく、神の憐れみによって一方的に与えられるものです。**英語では「Father… was filled with compassion for him」です。「息子に対する憐れみでいっぱいになり」です。**憐れみが神を支配しているのが分かります。**この憐れみゆえに人は赦され、救われ、神の国に入れられるのです。**天国とは「父の憐れみで満ちた国」なのです。**

息子は家に帰る前に、父にこう告白しようと思っていました。「**私は天に対してもお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。**」（15：18～19）ここで彼は自分の正しさも、息子としての権利も放棄していることをお気づきでしょうか。最初はそうではありませんでした。「**私がいただくことになっている財産を下さい**」（15：12）といって自分の権利を主張しています。

●パレスチナ人のカルメル会修道女マリアム・バウアルディは、ベツレヘムのカルメル会修道院の門番の修道女として1878年に33歳の生涯を閉じましたが、彼女の手記に「天国に行ったら、けっこう欠点を持つ聖人方にたくさん出会って戸惑うことでしょう。でもそこには傲慢というでは欠点だけは見当たりません。かえって地獄を見おろすと、ずいぶん有徳な方がたが地獄でひしめいておられるのを見て、びっくりすることでしょう。しかしそこには謙遜の徳だけは絶対に見つかりません。」と書いています。言い換えれば、天国では自分の正しさや権利を主張する人は誰もいないのです。しかし地獄を見渡すとそこには正しい人や権利を主張する人がひしめいている事でしょう。

ここに私はこの世の人に欠けているものがあるように感じるのです。今のクリス

チャンは「人権、人権」といって（それも大事ですが）、正しさと権利を主張しすぎているように感じるのです。

●曽野綾子さんもこんなことを書いています。「いささか悪の匂いのするものを、わが身に許している人というのは、誰でもいい顔をしていますね。引け目というのは人間的なのでしょう。自分は一切悪いことはしていない、と思っている人より、私はどれだけ好きかしれません。」「私が生涯仲良しにならなかった人種は、自分が人道的に正しいことをしている、と思っている人たちであった。」

まじめな生活をしていた兄は、「自分は言いつけに背いたことは一度もない。私は正しい！それなのにあなたは何もくれない。あなたは弟ばかりをかわいがる。不公平だ！」と言って、自分の正義と権利を主張しました。これが律法学者であり、ファリサイ派の人たちなのです。しかし彼も財産を分けてもらったはずです。彼らは体は神の側にいるのに、心は天国から遠くにあったのです。だから私たちも気をつけないといけないのです。

❹【聖餐式とは祝いの宴であること】

父は言います。「**肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。**」(23～24 節)
キリスト教では、死とは真の命である神から離れて生きていることを言います。命である神から離れることが死なのですから、神に帰ることが命なのです。息子は神の元に帰ったので生き返りました。神は喜び、祝宴を開きます。そのひな形が聖餐です。聖餐はキリストを屠って食べ、人間の復活を祝う式です。逢坂元吉郎は「キリストの幹につながる者は、みなキリストの弟子となり、キリストに似通う生活をする。その中心は肉体をとって来たり給うたキリスト、そして甦り給うたキリストである。このキリストの肉を食ってよみがえる所が教会である」といいました。ある本の中に、礼拝を終わって教会から出て来た信者たちについて書かれている個所がありました。

●礼拝から出てくると、われわれの村のすべての男も女も「テオフォロス」つまり神を担う者となっていた。だれもかれも聖体をいただいていた。だから彼らの血管の中には神の血が流れていた。彼らは神の子であり、神化されていた。確かにこの人々は粗野で、哀れで、貧しい農民たちであった。…しかし教会から出る時、彼らは自分たちのうちに神を担っていたのである。…人がランプなりロウソクなりを運ぶ時、その炎で顔は輝いている。自らの内に、光の中の光である神を運ぶ時、肉体全体がそしてからだ全体が変容され、美しく飾られ、内部から照らされるのである。…自らのうちに神のまばゆいばかりの光を担う人々の顔以上に美しい肉の皮膚を見たことがない。

幸せとは神の溢れるような愛で、自分は愛されていたことに気がつくことです。人生のすべては神からいただいたものであり、すべてが神の恵みであったことを知ることです。そして神をまことの命と信じ、神と共に生き続けることなのです。